

特集
まえがき

学校教育における実践知を問う

近藤真理子

コロナウィルスに振り回され、2年が経過した。マスク着用で入学した1年生は3年生になった。彼らは一緒に入学してきた仲間が大きな口をあけて笑った顔を見たことがない。うれしい時、悲しい時に抱き合って感情を分かち合えないまま日々を過ごしてきた。

不登校・登校拒否の子どもの数は減少の兆しがない。学校での集団づくりは同調圧力ではないか、学校では学力は身につかないなど学校への社会からの目は厳しい。学校長のトップダウンの下、成果主義の学校の中で、教員さえもストレスを抱えている。それでも教員は、学校は子どもにとって楽しい場所であって欲しい、育ち合う関係をつくりたいと誓を守ってきた。

今回の特集は、過去、戦前からの実践の積み上げから21世紀の知識基盤社会における学びへと100年の歴史を振り返りつつ、小学校から高等学校、特別支援学校をも含めた実践と教員養成における実践をも踏まえた論文で構成し、重層的な企画となった。実践と歴史を通じて、不易である真実を明らかにすることを試みた。

私ごとであるが、かつて本誌の投稿を勧められた時、私は「科学者」ではないとお断りをした。教育は社会科学で、「こうすればこうなる」という法則性や規則性がなく「科学的」に証明ができるものではないと思ってきたからだ。名人と言われる教師の授業の方法や思想を理論化することを試みても、一般化することは難しい。

方法やノウハウだけでは教育は成り立たない。教育は何を持って成果と言ひ、どの段階の変化を成功とみなせばいいのかがわかりにくい部分を大きく含む。

本特集では、実践の中から子どもと向き合っただけで見えた確かな事実、手ごたえについてコンピューターでも科学でも導き出せない証明ができたように思う。小、中、高、支援学校、教員養成それぞれの現場で積み上げてきた確かな思いと歴史が次の時代を創ることが明らかになったのではないか。

未来予測が困難な（VUCA、変動的 Volatile で、不確実 Uncertain、複雑 Complex、曖昧な Ambiguous）時代の学校は、コンピューターではなく人の手で創ると改めて確認をした。

川地論文と近藤論文で100年の教育実践と子どもの権利保障のフレームを概括した。森下論文で基礎学力、小学校での生活綴り方実践を土佐論文で論じた。五島論文では特別支援教育を通し、子どもが主役になる授業実践を述べている。高校生とのフィールドワークの実践での学びについてを山田論文、現場を創る教員養成の課題について藤本と安井が論じた。オンラインでは感じ取れない「子どもの声を聴く」実践が揃った。ぜひ読者の皆さんの感想をお聴かせ願いたい。

（こんどう・まりこ、教育実践研究）